

## ゲーテと医療（第3報）

——フーフェラント教授の人間像と彼に宿るゲーテのヒューマニズム——

鈴木 重統

介護老人保健施設 ゆう 施設長／北海道大学医療技術短期大学部名誉教授

はじめに 医を戒めると記して「医戒」と称するが、本書は18世紀後半から19世紀はじめにベルリン大学の医学部教授であったC.W.フーフェラント教授の「エンシリディオン・メデクム」を幕末の蘭学者杉田成郷（1817～59）（杉田玄白の孫）が訳し、嘉永2年（1849）に出版しわが国の医療倫理にも多大の影響を与えたことは周知の事実である。今回はフーフェラントの思想とその成り立ちをめぐって述べあわせてゲーテからうけたヒューマニズムについても考察を加えたい。

## (1) その生い立ち—イエーナ大学からゲッチンゲン大学を卒業—父と共に開業

C.W.フーフェラントは1762年、チューリンゲン地方のランゲンザルツに出生し、3歳の時から父とともにワイマールに移住し、1777年フランクフルトからワイマールに転居してきたJ.W.ゲーテの侍医となる。彼もゲーテと知り合いになり、シュトゥルム・ウント・ドラングの時期に成長し1780年にイエーナ大学医学部に入学する。しかし1年後の1781年にはゲッチンゲン大学へ行くことになるのであるが、これはゲッチンゲン大学がはるかに教育水準が高かったことによる。ブルーメンバッハ（人類学）リヒテンベルグ（電気生理学者）などの指導をうけて卒業後はワイマールに帰り、体調不良の父を助けて開業した。弱冠21歳の彼は診療は勿論のこと朝5時から7時までの2時間を文献購読と症例検討にあて厳しく自分を律した。

## (2) ゲーテの侍医としてゲーテから学んだこと

中世のヨーロッパにおいては、度重なる伝染病の蔓延のためか「死を思え」（モメント・モリ）の時代であったが、ゲーテはそのアンチテーゼとして「ヴィルヘルム・マイスターの修行時代」のなかで「生きることを思え」ということを唱え、生命の維持を医師の使命とみなすフーフェラントに多大の影響を与えた。

## (3) 開業医から大学教授へ

フーフェラントが父と一緒に開業していたワイマールでは、毎週カール・アウグスト公を中心にゲーテ、シラーなどと共にその主治医であるフーフェラントも交え懇話会が開かれた。その会合でフーフェラントが「長寿法」について述べたとき、アウグスト公はいたく感動し、文部大臣をしていたゲーテをよび「彼は町医者として我々を診るだけではもったいない。彼の学識や才覚は大学教授に向いている。イエーナ大学の教授にしてください」と申し渡した。1793年の復活祭のころであり、直ちにイエーナ大学法学部の教授に就任した。

## (4) ベルリン大学医学部教授時代に記述した「医戒」が日本に及ぼした影響

1810年にベルリンにフンボルト大学が創立されたとき、招聘をうけて医学部の教授となり「医戒」を著し、のちに緒方洪庵の適塾の「扶氏経験医訓」として長く塾の教えとなる。「病んでいる人を見て救おうとする情意、これがとりもなおさず医術の情意である。」「医術はいとも崇高な神的な技芸のひとつであり、そのさまざまな責務は、宗教と人間愛の最初のそして最も聖なる掟と完全に一致する。」これらは「医戒」で述べられている言葉であるが、フーフェラントの根底にはキリスト教的愛の掟があり、日本の仏教儒教道徳とはなじまない一面もあったかもしれない。しかし一方では単に「道徳の人間」と言われるだけであるならば、もともと精神的修養の価値を認めていたわが国の蘭学者たちは、その論旨についてゆくことが出来たのではなからうか。事実、フーフェラントの説く医業の高邁な理想な洪庵が適塾を中心に種痘を無料で広めることを実践したように蘭学者たちに強く訴えるものがあったと考えられる。

**要約** フーフェラントの中には、古典的な理想主義、宗教主義、のほかにゲーテからきた浪漫主義、ヒューマニズムや自らが学んだ自然科学、哲学などお互いに異質なものが渾然一体となりつみ木のように重なっていたように感じられるが、とりわけ警咳に接したゲーテのヒューマニズムに影響をうけたように思われる。